

ダルクにおける「回復」の社会学的検討Ⅱ (5)

- ダルク在所者の「身体」と「欲求」 -

中央大学 相良 翔

1 目的

脊髄にできた「良性」の腫瘍のため身体障害をもったロバート・F・マーフィーは「病いは我々の肉体についての無意識に対する真っ向からの挑戦である。病いの到来とともに身体はもう当たり前のものでなくなり、意識的な思考の対象となる」(Murphy 1987=2006 : 35) と我々に伝えている。薬物依存も慢性の病いの1つとして捉えることができ、それはマーフィーの言う様にダルク在所者に対して自らの身体に意識を向けさせる出来事とも言える。それでは、薬物依存はダルク在所者に対してどのような身体感覚をもたらしたのだろうか。

「人間は誰だって与えられた限界の中で、何とかかんとか生きていくしかない」(ibid : 121) のであり、薬物依存によって抱えた「限界」の中でも人生は続く。薬物依存になった後の人生の変遷を記述することは、彼らにとっての目的であり、実践のプロセスでもある「回復」を浮き彫りにすることに結果的に繋がるだろう。

2 方法

7名のメンバーで構成されている「ダルク研究会」は、2011年4月から大都市圏に位置する2つのダルク在所者14人を対象にパネルインタビューを実施してきた。本報告ではそのデータを用い、「身体」に関する語りや事例を抽出し、分析を行った。

3 結果

データ分析から、ダルク在所者の「身体」からもたらされる主な問題として、偶発的に起こる依存薬物に対する「欲求」が挙げられていることがわかった。

ダルク在所者は「欲求」に対応しながら生活している。たとえばFさん(アルコールと覚せい剤に依存)の場合、ビールのCMを見た時や食料品店のお酒販売コーナーを通った時などに思わず唾を飲んでしまうほどアルコールに対する「欲求」が生じることがあると語る。また、ダルク在所者との関係がこじれてしまった時に自暴自棄になり、飲酒への「欲求」が生じたともFさんは語った。それが原因で実際にFさんはダルク在所中に飲酒を2回している。覚せい剤に対する「欲求」についても、稀に生じることがあったと語った。

そのなかで、Fさんは「欲求」に従い飲酒や覚せい剤を使用すれば人生が破綻とすると考え、「欲求」が生じること自体に恐怖を感じていた。その一方で、「欲求」はダルク在所者にとって共通項であり、在所者同士のつながりを感じることに喜びを感じていた。

4 結論

「偶発性とは、統制されえない力に従属している身体が存在状況」(Frank1995=2002 : 54)であり、ダルク在所者は「欲求」にその身体に従属させていた。Fさんの場合、パネルインタビューを通して「欲求」に関する語りの内容にはあまり変化がなく、その概要は「欲求」が生じることには抗えないというものであった。それゆえにFさんは「欲求」に身体に従属させ続けていると言える。しかし、Fさんが「欲求」により在所者同士のつながりを感じたように、「欲求」への対応を通して〈伝達する身体〉(ibid : 77 - 79)に近づくことにもなりうるのである。

文献

Murphy, Robert F., 1987, *The Body Silent*, Henry Holt and Company (=2006, 辻信一訳『ボディ・サイレント』平凡社.)

Frank, A.W. 1995, *The Wounded Storyteller*, Chicago: The University of Chicago Press. (=2002, 鈴木智之訳『傷ついた物語の語り手-身体・病い・倫理』ゆみる出版.)